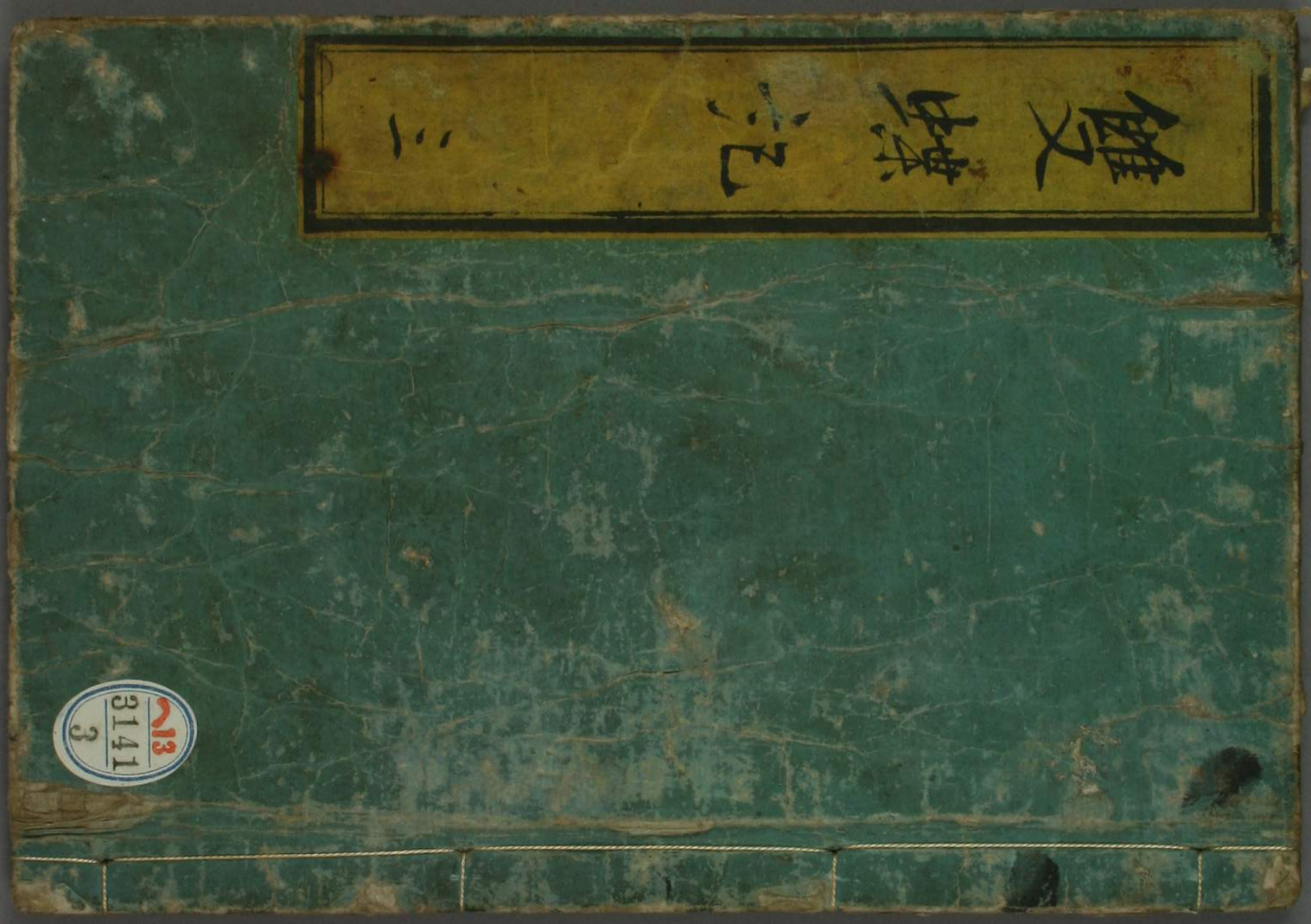
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



713
3141
3

へ13
3141
3

茶磯榮

雙蝶記一名霧籬物語卷之三

江戸　山東庵京傳編

早稲田文庫

(六)陽炎しもきるもの狂ふ牡丹の睡猫

月影个谷判官の執權職山咲庄司雪森ゑ三人の子あり。兄を餘字兵衛とゝ。次を餘吾郎とゝ。末の娘を小雪といふ。惣領の餘字兵衛ハ妾淀瀬が十九歳のとき産る子にて。其後ゑびくく子なりしが。ゑるうゑて本妻の夕波とゝ。餘吾郎と小雪と二人を産ぬ。ちゝ本妻妾ゝそれぞれ。ちさなる者にて。平日なんむつまじく。嫉の心ハ露だにもなりゝ。本妻小雪を産よりとゝ庄司ハ主君判官よりたゞして。信州笘形の軍ゑむゝ。其留主ゑ

産となる。本妻産後のなやみつよく。死にいたらんとせしところへ庄司皈陣し。鎧をぬぐ間もなく。其侭にて臨終の枕にいたりけるが。此病中妾淀瀬心を尽して看病し。此ことをもよろこび枕につきそひて泣居けるに。本妻くるしき息をつぎつゝ且夫にいひけるは。妾むなしくなりて後后妻を他よりむかへ給ふまじく。三人の子どもがあはれなるべし。ねがはくは淀瀬どのをもつて本妻となしたまはりなばうれしからん。淀瀬にむかひ。餘五郎小雪等を実の子のごとくあはれみて。養育をさしむけ。然らば妾草葉の陰にても心を安くし。子ゆゑに迷ふ黒暗の地獄の苦患をまぬかれんといひおはりてあへなく身まかりぬ。是によつて日数ふりてのち。庄司淀瀬を本妻にせんやといへども淀瀬をひたすらこれを辞退す。されども亡妻の遺言といひ子どもらのため

なるとなし。あながちにもとめて遂に主君に願をいだし。あらためて淀瀬を本妻とぞなしけり。素淀瀬は志やさしく正しき女なれば。前妻の遺言をわすれず。実子の餘字兵衛よりも継子の餘吾郎小雪二人の者を深くいつくしみ。朝夕撫按心をもちゐて育けり。惣領乃餘字兵衛いかなる所存にや。十五歳の時出家剃髪の望ありて書置を残して出奔し。行方しれずなりぬ。此時餘吾郎は六歳小雪はいまだ二歳なり。其後小雪四歳の時乳母に抱れ。庄司もろともつきしたがひ。甘縄の神事を見物に行けるに。雑沓にまぎれて行方しれず。淀瀬はこれをきくとひとしく心乱れて歎悲み。前妻の位牌にむかひても申わけなしとかなしめども。庄司もともに連去りしかれ災にあひたる事なれば。誰を恨む人もなく。唯生死のほどしらざれを

露たりのさのみにして。ト盆とおゑ神仏と祈まくるに心を尽し。
近国の山〻鷲の栖べくおりかぐりと。孤らどそうどもるる名しぐも。
更に行方をしれざりしを。失る日と金日ふして仏壇といふに菩提乃
種と植るのこゝろ。さしもに九夫のわさまもこゝろ人神仏の擁護にも。
活ぐ〻へ居るこゝろやと。夫婦朝夕の物語のくるゝ此度をいつ
出して。泣さる見ゝるゝ多。此小雪い生つき養蘭玉乃やうなる顔
ゝるゝ。高頬ゝ一つの黒痣あり庄司が高頬にも黒痣ありけるぞ。
れぞ父の讓の黒痣ゝ。平日の口もとにもいくるゝ。命に恙なく。
唯是の〻後の證拠なるとし。淀瀬が歎いも理ゝ。のまてど庄司
三人の子を持ぐ。惣領を出奔し娘い失て生死れぞ。唯家にあ
者い餘吾郎一人ゝ。是等の始終とくしゝを支長く讀ふもろ

らいしれた。其要を撮くるるとの。扨餘吾郎成長にまさるへて淀瀬
と實乃母のこゝに敬ひ奉れた。淀瀬も不便いやまして。いつくしむ
こゝ限ゝ。○かくて今年庄司ハ五十五歳にくる。餘五郎い二十二歳にな
いくりける。扨又庄司ゝ父餘吾郎ゝ為ゆハ祖父ゝ。浄閑寺士今年五十
年の遠忌にあるれにつき。菩提のさる紀州高野山へ石塔を建。常住
金を納むべくと云ハ立主君に願ひ餘吾郎を代参にして。紀州へゆう
しむべきゝ定まりけるゝ。餘吾郎いまゝ若年ゝれた。物馴ゝる者を副
つハきべくとおりゝ。家来南方十字兵衛今年五十餘歳の老人ゝ。
老實ゝる者ゝれた。これと守役にして。常住金二百両石塔料百両都合
三百両別に路用を持しゝ。已に行装ていのゝ名れた。吉日とゝ
鎌倉を発足ト。わどゝく京都に著く旅宿とる。石工ゝ

今一て石塔を造らせる間、しばらく當地に逗留して居たりしが、此しるべ彼箕腹蛾右衛門も、主用まて上京し、旅宿に逗留の間、餘吾郎に出あひ、ともに旅宿のつれづれを問あひ、二人連立て名所古跡かどとりどりの旅乃憂を慰めるが、これもつれづれの蛾右衛門が心中に悪計をかくしひつまるる。後ふぞかりひもとき色々の○尋常の寒梅も、折て軍持に挿のおもんばかり一段の清香人の心を感ぜしめ、民屋の衰柳も、移して宮苑に植千尺の翠條、別に春風長るべしといふ。宜哉駕籠塵兵衛が娘小蝶が手越の里に一歳住其後都五条坂に賣替られて、富士屋の吾妻と阿曽比しられ、且は古とおもふ。夕べは新とむつまじ。寄てうるわさ浪の桃こずゑ夏身しるる。原貧家に育し娘なれど、花柳の街に移植て、其乃舞

綾羅乃衣十分に粧ひ、自然の養顔に今一しほの色まして、嬌艶人とおもはれ、花魁娘子とぞうにる素聰明生まれ、糸竹の手まくべ更なり。歌舞倩き花むとびのさくらの艶雅に業をいそしむ。情のいろ殊更に深く、此五条坂に早くも五年の春秋を過し、今は十九才ぞいとる。扨一日吾妻が、もとゆひて錦のふけ紐に金銀の鈴をつけ、縫と結て手飼の猫をさしうる女童に抱せ赤前掛の花車の女に日傘をさしかけさせ、邯鄲の歩をうつして、絃歌の声のいとあやしきる街に練出るが、留木の薫馥郁しく、あうの人と襲歩むに、紅乃裙のるるさま、嬋娟たる牡丹花のうつくしさ、疑ひぬ。かるかして古綿帽子を頬ふかくし、針目ぐらき布子に杖をそ

貪けう老女。吾妻がわゆむ側ちく寄て。そんつりろまろ後前う
つきゆしふさま。ゆ〜ふ年旧老猫の小蝶よ狂ふ〜ぐくう。花車の女これ
とんく。脣とあるゞ〜ていらへ多。年の始乃破魔弓よ造つけうれ
尉と姥乃。離別〜するれうと。ろうそを。ゆく廣へさ道
ちぐらと。こちの君よ。ちれりうと。歩ミちふ妨さる。臭りの者ろうぞ
嬰こよ。うくよ退くうくく行と。いしゆくさげふいつ。老女ハ耳ふそそ
入ど。腰と打て目と文う吾妻ゞ頼と打まり。さくもさくしよ
まうりてうろうき姿の君ふ。卒尓ふしふあれど。ゆん者ひまえ
願うたしうりて。汚穢我者と。うろうこど。此曲中よまぐく来て
其いうまと一通ゆてうくくど。花車の女おかあ〜ミ。扨ハ君ちよ
近寄て。母の伯母のしろりとゆ。物移りうさくハ袖乇ハうひ

うくんしく去ぎやと。声高よ呼てつきのるを。吾妻ハ制しく老女う
むうひ。つひふ見うけぬお年寄妾よ對〜て願しゆ其ようけハいうるゆと
うぐまて。傍辺の編笠茶屋の床机よ尻けてやうくひれど老女いく。
其ようけうて別のしゆふもいけと。此婆ヒゲ月〜星〜おりひてゞる児子一人
けが。山崎の油賣よ。挑賣〜く貪さ暮とつさも者。日来実体うそく
うせゞ。女ふ〜ぶふ心とうと者う〜孫ど。此曲中へ高よまうう〜つぐよ。
ゆん者の揚屋入ふゆふと見ふく心迷ひ親の口うまま〜ゆきうれど。
衰病ゆひうらふやしぶふおりひまうりひゆ多。愚ゆ奴しさまくゆひうどど。
いうゆう宿世の因果ゆ。おりひうりうくぐうねど。うれやこぐうく死ぬ
ゆうん。氣つひうゆ時と商ふ君うれど。女解ゆ聞ゆ〜たまふまし。
吾妻さゆよ此ようけ成告ううえ。歎さまう〜〜ゆう〜、盃ようと戴うど。

おりふしきたりてかなへしふみの慰ありしぞ。やまひにおとろへしゆゑ久しく
油をうりしかの。此処まで伴なひしなり。扨かくハ一旦ありて詞をかけしく
さまぐれとかねて彼方をさし招き。児子ころんといひけれバ。出口乃
柳の木陰より。油擔を挑け。油をうる古布子。うるもまめしき
姿なるが擔をおろして母乃背後につい居て。かなしげなるありさまにて
詞す。母ハ児子をえりそぞ。なちが切なる心底を。喉うるを語くあきらめ
ますますせとしめましくやうく顔をあげ。かく貧き者もえりこね僕が執著
心語もいしとえげりしかれど。是一朝一夕の事ならず。去年の春ふと
おん影を見そめてより。片時もわすれと忘るることなく。人間の一生ハ秋の草に
異ならんば。かり个様の美人を得て。せめて一夜をあかさでおかんと。死をもとも
恨あるべしと。およびなき思の海深き身の不堪りはていふなり乃金

ふて一夜とりてむべきしと人につきて聞けるに一夜の揚代銀百目なりと酒食
の價ななれの費あまぞ。小判五両ぐりの金なくてハなしがたしと
といふしゆゑ唯あきれくしてもかく思ひきりとあきらめ。拙き我者を
恨げにおもひとどまるべくおもひしかど。煩悩の大扞どうしても去らぞ。思慕の絆
きれどもきれざれど。我身と焦を油の地獄おのれと責るのうみなれども
志ひなく。古より志ある者ハ事竟に成るといふ詞もあれバ。望を遂
まじとしふもあらざとおもひつき。出口の柳の糸より細きくらしなれど垣乃
露よりかろき利分のうちより。一日に三分五分の銀子をのけく
積貯今ちくに五両の金とそのひてし。岩に花咲ことちぶ
又人の語るを聞く。吾妻どのハ引手あまたの名妓なれど。富貴乃
人なきん一応や二応でハ靡かぬよしかしゆゑ況まづしき

我身を。さしの揚代とて。ふ[illegible]てんさまざまとぞ。
病の種しるり。人ちまね我意の関りに。宵く毎に痩やせり。
かどく命も危うしと母の情の詞もやうく。今日
此辺までいまゝで来つ。意の菜種の油の本うけさん
ちぐり糟是ばかりの。油搾の裏にて五両の金といひて
吾妻に見せさしの親くみと沾もふいてしぼりて。せうて一盃の酒
ゆうと酌んしく我此病想とそ〳〵しまうれうと耻とものゝて
語りるが金とつみる紙に物うさるとは。
山崎やもぐり乃や油賣打こりもまぞ泣涙ゆ
歌とうきつひう。吾妻いうれと見くいいと哀うおりの目に涙
とそ〳〵ぐうつ。やう妾ゆ見れ。さんうり辛苦といいうど病う臥

とうまでふ深くうるうさよ。原妾が心貪福貴賤う
かりうど只趣と慕ふ見ないそのう見身の貪きとそ〳〵ゆ家物語
ようとおかれど此辺い街上のそ〳〵ちゆ。妾ゆ坐敷へおりうそ。
傷辺にあるる花車の女れと聞くものびわゝど。袖をめうそ此
婆々や油賣のまぐしき男とつるゆれとまゝいい他のぼえをわ
といのくそびまとじ。吾妻い耳ふも聞入ぞいざまくしものく袿つが
とる裙さとれ二人女童と服立ま。三ぞ仏の浄来迎玉の芽ゆりと。
ゆしく光明勢下鈍の蓮歩とうつを八文字親子二人ハ極楽ゆ入
とそのうちうて。後ゆつさそれ歩み去ぬ○りて油賣親子乃者い
富士屋がうとふ去青貝の坐敷と称ぞる一間ゆいうて見ふ風流
清雅ゆしく旦美麗ゆ。唯光耀くるる用もまぐゆ。えゆ〳〵そ

又楽口説之三
菜種油
浴衣
山崎の
油屋
餘五郎
餘五郎出

都五条坂の遊君
富士屋の吾妻
又楽口説之三

燒の薫室中いとくひろく皇と襲て、床柱床縁違棚乃板。
袋棚の戸のくぐひいさゝ乃。天井欄間の板明障子の腰板屏風歩障の
緑衣折簞笥のくぐれ都青貝と鏤ゝ。二階の厨子文案文車文臺
のくぐひ料紙硯匣香道具碁將棋双六の盤嚴器鏡臺枕乃
くぐひ皆青貝ゝ〳〵ゞとくひ〳〵ゝ。かぐの雛妓女童ら乃持運
酒飯の器と見るゝ是乃もくぐく青貝と鏤ゝ。誠是仙窟ま
遊が如く張文成が筆ゝ〳〵。書をゝ乃もわゝゞとおりれ乃。
志ぐゝありて繪障子とさゝゝき衣のおゝゝくゝゝて吾妻
ぢ衣服と美ゝく出る姿と見るゝ袿も帯も青貝織ゝの織物
よくれゝくあやゝこの手とてくゝく西湖の十景とゝやゝ織せゝり。
きて油賣の男のくぐ近く寄く笑と帯郎の計をゝ成ゝ。

のゝやゝん名とゝ乃ゝ油賣いまゞりくもゞゞり乃ゝ
明障子と乃ゞゝ乃ゝ人ありてゝゝやゝ打笑さゝゞふゝ
ゝた君ゝ。ゝやゝも曉ゝ。今人何とゝつむゞきゝゞもの乃ゝ油乃
正体とゝゝりくゝんせゝんゝゝ乃ゝ立出ゝ乃是箕腹蛾右衛門
ゝゞゝ乃。さく蛾右衛門ゝさふむゝ。くまゝしつけゝきゝ
用意の品とゝんゝ携ゝ出よゝゝゞゝゝゞゝゝゝゝゝゝ。
許多の歌妓幇間等廣蓋のゝふ黒羽二重ふ鹿子紋つけゝく。
白ゞゝの袖べゝゝゝ羽織小袖茶の下黒箔の帯磨打ゝ
切箔の畳紙平塵地の一口印鞘阿保秋山が川原軍のゝゝ
ゝる扇柴のおき頭巾書院鏡子さゝゝゝゝゝゝ大尽乃身上の
具ゝのゝゝ乃載てゝゝげ出大勢立ゝゝく油賣の男のむさげゝる

布の手とぬぐいの美麗なる衣服と著せられて。忽ちに大尽の姿しなり。上座みなりして服息よ月とうそぶれど。この老女いとるる下坐に居らぬ。吾妻はあわ打笑ひて。郎は実の油賣にあるまじと推量せしに。果しく さぐもなどそなりる戯とうそぶくべ。蛾右衛門とみ出是全戯よりぞ。其いれいおのと語て聞せし。此人は我もしれ友そ。山咲餘吾郎といふ人なる。此度所用ありて上京しおのと前の日ともあれて此曲中と見物よ来ぬ。武士あん身と見そて。頻よまうえん夏と望しくとも。あん身を いうる富翁嘉客。みも。用意みいまうえんとまうど。をでう頃日鮒尾賀堂左衛門とうふ金持の武士の浪人あん身と深く意もうえく。許多の黄金と費せしど。一夜の枕もやはぐらし。

しても尋常みあまうえんまじとおりのおのと嫌の意みく。餘吾郎ぬしの誠心を見とべき此計とおりのつきね。唯うるそあ乃戯よおりのあんそしあんを。餘吾郎も其詞の尾よつきく。今蛾右衛門ぬしのいまし所のでく。少しもいうりあるど我姓と山咲しうとと山崎よしうて。おりのつきる油賣ぬくまで慕誠心を。愛ぬさあしびあうしうとうの名ぞ。吾妻いしうとまうしげそ。烟花乃いやしく妾乃身とさだうりおがしうあうとと。何とりそうこれふ報えべき。妾これまで許多の客と接えべきもど。或い酒と合見るあり。或色よ耽るあり。唯笑と買歓と求る支のみ知く。香と憐玉を惜の真ある人みあうど。彼と見れと見るふつけても。郎が如き志誠の人へ又得ぐ下いうでう等閑みおりひえるべき。さるゆても彼老女い

何ぞ[illegible]。餘五郎いへく。これも蛾右衛門殿のえんゆえ。諸國の靈場を拜みめぐるもの旅の老女と。ふ一日屋ひときつるなりといへさして老女ゐむえん。汝を勞して我望をとげしえべ。骨折代のことを与るなりとのゝく。彼五両の金を与へ給へ。老女い金をうけ[illegible]めてこゝろこび。やゞて別を告く皈ゝ。くて歌妓幇間皆さまゞくの藝を尽しく酒とそゝめ。吾妻もつゞく琴とゝき多〳〵しく饗應けまを。餘吾郎ハ遊仙の夢をゝとこゝらして。魂九天の上ゑ昇ま。手の家足の路をゝとゝ。やゝく時ゝりて夜ゐいう。酒酣なるゝ。吾妻餘五郎が手を携て閨房ゐ〳〵〇くて餘吾郎ハ此日を始ゝて。此一條の春路守役の十字兵湯ゐハ。神社仏閣ゑ詣名所旧跡を遊覧ゝゝりて。日毎ゑ此曲中ゐ来て。

吾妻ゝ吾妻も餘吾郎が美男なるゝ趣ゐ[illegible]ふけく。水ゝゝさゞ〳〵そゝぎりゝる。ゝゝ吾妻ハ餘吾郎に恋ゝ文のめ〳〵出さゝし。同家中の士なるゝ。ゝゝ餘吾郎も吾妻が素姓をゝゝ。去程ゑ餘吾郎ハ。吾妻ゐ深くゝゝとしゐよつきて。めがゝゝ十字兵湯がまゝを去のぶを憂ゝゝ。一計を[illegible]ゝく。十字兵湯にいゝゝ。我石工がつゐ[illegible]。石塔ゑ用べきゝゝ石當地ゑあり。合さゞる他國へいゝてゝゝき石をゝゝするゝゝゝ。汝ハ旦前ゑ紀の國ゐ赴き高野山ゐ登て墓地をゝて。宿坊ゐ逗留しく我到るを待べし。我ハ當地ゑ殘り。石塔の成就を待て後ゝ[illegible]。十字兵湯ハ老實者ゝゝゝと偽り

計ひ[illegible]。[illegible]を[illegible]に任ずべし。隨分石工といふ[illegible]
一日も[illegible]早く彼処へおん越あるべしとのこと。[illegible]
の路をさして出去ぬ。かくて後い餘吾郎[illegible]れをかるめもく。
吾妻が許より連留して旅宿[illegible]ある日い稀なる。笑ふ又新屋
賀堂左湯門と云ふ武士の浪人此年の春より吾妻と深き慕て
許多の黄金と費といへども。吾妻ハ殊より彼をきらへ。さまざまの乃
[illegible]より托して接ざり[illegible]。まことく胸をにぎ。手段尽し品どりして
相[illegible]をもとむれども。一夜のそへ即ハ更なる。[illegible]
[illegible]堂左湯門へ深くこ[illegible]恨[illegible]。餘吾郎も此
程[illegible]く吾妻が許より来らざれた。吾妻ハこれを[illegible]若心妻
[illegible]。病ふ托して打籠居[illegible]。

夜昼ぶ[illegible]食とおがきの。古葛籠を背へ。富士原乃郎
[illegible]妻が国より[illegible]のび入。独即居[illegible]吾妻を捕へ。手拭をロ
[illegible]。葛籠の蓋ハ[illegible]入て。これを[illegible]。旧のしるしより逃[illegible]
[illegible]去大河の川のかたりよ此より一艘の船を繋く
待人あり。彼昼ぶ[illegible]此より葛籠をおろしく。裏より吾妻を
[illegible]。口よりまきつけ手拭をとり捨て。吾妻を船中より投入れ。吾妻を
きえ[illegible]ぐ[illegible]ありて人ごゝらも分りなるがやありて月をひ[illegible]。[illegible]
月のひかりよつきく四辺をかりうるふ此川を漕々として宇治川しも
[illegible]大河あり。此より[illegible]ある人ハ則是堂左湯門なれた。吾妻を唯あ
たるばかりあり。[illegible]堂左湯門を[illegible]を船より[illegible]。是[illegible]
の金をわ[illegible]船と遠く漕いでゝ吾妻を船中より打伏て泣居[illegible]

多立の雨ゑ蓮の花をそこなひ。木枯の風ゑ玉の枝を折るにたりとさ
がり。堂左衛門は怒りて面色そ紅中ゑ座し。吾妻を詈ていはく。
汝輩よわ[illegible]我ゑ[illegible]ゑ我ゑ[illegible]ゑよくく実。我汝が高ふ許衆の黄金を費
[illegible]ゑ我を癩人のごとのみきらひてあいぎらふそもいかる理そ金だに
[illegible]何者にもなほ[illegible]ゆゑ阿曽此のあしひなしじや我汝ゑ[illegible]き
目を見せく。十が一つ憤をとゝめあしとゑひて。ゆく奪出ぬとのへど。
野ぶせりも詈くロをとゞめどさて此舩を遥ちふの芦深きところゑ
漕入く。堂左衛門は堤の上ゑ起のぼり。そゞろ携さる吸筒をとり
出し。由ゑ手ずから舩中を見おろし。其女を此ゑ引あけく我酒の
加させ[illegible]つゝ世ゑりいもろえいしひ法。吾妻を引立て堤ゑ
[illegible]吾妻は紅涙ゑ抱きくゑて身をそゞろさん。

堂左衛門いとれをりてく。ちぶしとゑ女めろなとひ法。手酌ゑ数盃をしを
かけて舩中ゑとゞり来つ。そゞろ吾妻が手どりて[illegible]そんと
もるゑ吾妻いとゞ[illegible]とゞ[illegible]泣さゆゞた。堂左衛門いまゝく怒て。
やとれ汝我ゑ打まんゑもゝ。ひとひて。髪首をさゝて引倒し
れを擲柿枝ゞりくゞりくと落。鬢きれく翠の黒髪そゞれ
が。堂左衛門拳をゆゞりて打んとゝるに吾妻ゑりくるりく桃ゑ立
上ゑいとゝゝ[illegible]く張ゑおつる水中ゑ紅りんとゝゝ世ぶそを乃
乞食のそゑまをて抱きとゞゝ。堂左衛門い盧胡汝身を投既
体を[illegible]て我と離さんとゝゝ。さく汝はとゝ我汝とゝ[illegible]
奪ゝ[illegible]ば我ゑ於く何の難義ゝ[illegible]。さりゝ金[illegible]
やくゝ[illegible]汝ゝ泣やまぬ敢て飯らゝ。泣やまぬゝ近

故をもまーしろふるに。吾妻いやうく泣やうれを。堂九湊門を野のぶせりよ
船を漕しやうく。旧の処より飯屋。吾妻を岸の上より投上ゝ。私をいたく
ちりあく漕去ぬ。吾妻も毒蛇の口とまぬうてうしろへどこ。此しまろも
もべて草花々と生ぢり。蕋濃ある野原そ。方角ぞふもれを。殊更
夜中のしでいづくと心あてそ走るべうもわしに。恰足の化蟹のごくうれを。
もべきやうかく。只声をうらうらて泣るれ。側づへの女童ゲ声して。
こちの君何ぬうもそれを目を醒ーを。ちるよ心つきく睡を醒
せたこれを南柯の夢ちりり。吾妻をいとゆげふ息とつをうれ
漕とたーゆよしちびく身上の汗をぬぐいせ居ち祈しを。花車の女
吾妻よむを。堂九湊門ぬーーりんと議ー
ちりて。月の。價を千両ちきちる。此庭の牡丹の花の散比化於日を

金を流して。曲中と紛したまぬ。ゆんが彼主を
よし。そんなの心ぞかし。彼主のどを金多く持ちへんる
おりれるふもんのまん幸をしげ。月受のゆもちぐくちへ
ちまん。どちのくそぢ笑を。吾妻をこれを宮しを胸つどふさ
りて。ちぐーつんを。ぢりり。○遠ちおりんちりあを時へ近き恋へ
ちを月。今餘吾郎が月の上ちり。餘吾郎ちぐのかどへ路用の金の
うちと遊與をつをるが。後ち吾妻と揚づあふーて奢をきちめ
るゆち纏の間ち彼常住金の二百両石塔料の百両まぢ張られ
つへ尽ーしるまぢいふとぢきとちへど更ち術計をみれを此かどへ
吾妻が許ちゆうぢ旅宿ち籠居くちちり心をちるーの多。吾妻ち
月ちより日毎ち文をおりるが。一日の文ち堂九湊門妻と贖ちさんと

かのよしをいつきて急ぎまいりたれよしを越えて餘吾郎いまいく心と
くらべる。其夜かしこゆたかく吾妻よまいりたれ吾妻いかにもこの方愛の
るを歎きよき思案しくわれうしろの法のこり。餘吾郎今更
常住金石塔料のうてうかいぶる金とのらん尽せしねさらふいん
かくこの先富貴の心をなぐさめて後よ良計をかんどしこんふ。
まつば我急よ水風一ぐんつんして金をとりよ也。堂元湯門より前よ贖
つてとぶしこんに吾妻をこれをはてどうく心祝安んじ。酒酌
まくく辭結をうるるが餘吾郎いえ来酒量わされどもまだしも
然と忘まんしふ酒と飲さしして此夜も爰よ寝し翌日も飯らん。
三四日逗留し。四日めの日彼吉見の坐敷のくしらく咲く庭の木
草をかぶりて二人まるやふ酒を酌うしるが吾妻手匣をさぐりて鋪乃

手帀よりて横笛と取出し。これい妾ダ父の秘蔵せし濡髪と
夜くうう。あん月出る夜の物語よ笛と好くくしのまんしが。
さぐりて堪能よおかんくしあ。妾も汗端をまつびぬまど。夏節滋月ま
くくまば静心をくくもてあきあ。孫ダくくそくまれくくよ餘吾郎いく。
おのれとそも拙れど所望くわれを默止ぐしくくん并笛とのて
一つの笛と二人あくび居く其手とをく餘吾郎指と撮む。吾妻これと
吹出しくれ老是冬乃始小春くくよ時節そ殊よ暖氣ありしが。此
庭の花壇よ植る冬牡丹の花霜雪の欺をおそれど咲ぐれそ。
園色天香春の花よまるくおとくど。造化の不思議をいつくくそ殊
よ奇きを一つの朶よ二輪の花並咲く一輪い赤く一輪を白。これ
ふしゆ。雙頭の牡丹。時よ二の殘蝶花香とくくふ翩々として

なるべしぬ。此二ツの蝶一ツハ白一ツハ薄縹の色なり。是もまた奇なりとゝのべ。なるに吾妻ダ手飼の猫花の下ニ睡居るが忽眠を醒して二ツの蝶を目ざけ繼ようけるを鈴をかゝくと鳴しつゝ起上り駈めぐりて餘念もなげに狂ひ居る折しも庭さきの紫折戸の外面ニ白木の手束弓ニ短冊をなをしつけて持る歌占の女趣趣耳をうつけて笛の音色ニ惑はされる体なり。こゝの二人ハ笛を吹を見其声咽々として人とゝして腸を断しむ。猫もまんく蝶ニ狂めつゝ薄縹の蝶をとりて喰殺しぬ。時ニ北風くゞ吹て牡丹を揺動しけるが。忽赤き方の花なりくと散て白き方ハ忽ち鈴音郎ハ見て笛の手をとゞめていとく。あか不思議や牡丹花下の朧猫も英心蝶よりハ我も心牡丹ニあり。一枝ニ輪の花咲く

赤白二色なり。豈天工の私ならんや。昔唐の玄宗皇帝沈香亭前ニ牡丹を植て。楊貴妃と共ニ愛しぬ。是ハ双頭の牡丹なり。帝ハ是を見ていとく花木の妖なりと賞しぬ。楊國忠ハ牡丹ハ花の王なり。今ハ花の王ハ牡丹ハ花の王なり。一枝ニ両花の王なり。南朝北朝ハ一天下ニ二人の王のおりまして異なり。然ニ南方の火ニ属て紅牡丹水ニ属て北風のゝ散失しぬ。北朝の聖運強くゆしく。足利殿の德風草木をなびく。南朝味方のこゝの衰花と散しぬ。前表ハ前の年信州笛形の城ニ亡びぬ。相模次郎時行ハ其砌打死しぬ。大仏九郎貞直ハ藤堂餘類南朝の天城を假て。足利殿を亡ん。緋威の鎧草ニ刃をとりて。冬牡丹霜の剣をまのぐ。北朝の烈風ハ

防力あらん。今見るに紅牡丹の散るは平家に属し。時行が残黨滅亡の
疑ひ[illegible]足利方にそへ吉祥なり。と心の愁そうち忘れ。いと
よろこばしけふいたるが。吾妻を流りて。妾が實の名を小蝶と
いふ。二ツの蝶も夫婦も同然郎と並て百歳を花に宿てこそあらん。
心の頼も遂らまじ。女蝶の方を飼猫に奪はれ。男蝶は我方の人の不祥なり。昨夜もまた
限て根引せんとよしなれば。妾は此牡丹の花の散時節乃。
そこんを怒るなりとて。彼が方へ根引の相談きはまるとは。結存れ
心ゆるしかねて。産牛織女の絶ぬ契を羨て比翼連理の
夢。其時に胡蝶の夢しおりしてしたりて。餘吾郎が膝に顔を
おしあてて声をあげて泣ぬ。餘吾郎は背を極撫てやりぬ。